

知的障がい研究会研修会

「自己肯定感の低い生徒の理解と支援について」

- 1 日 時 平成31年1月7日 午後1時～午後3時30分
- 2 場 所 鳥取県立琴の浦高等特別支援学校 会議室
- 3 講 師 上智大学総合人間科学部 教育学科 酒井朗 氏
- 4 参加者 琴の浦高等特別支援学校職員  
(※当初は県立高等学校職員の参加希望があったが、日程の変更を行ったため外部の先生方の参加が難しくなりました。)

5 内 容

(講演を挟んで、学校案内及び学校説明、その後は事例検討会を行った。ここでは講演会の内容のみ報告する。)

「自己肯定感の低い生徒の理解と支援について」をテーマに講義をしていただいた。

はじめに「自己肯定感」の定義を全員で確認した後、話を進めて頂いた。「自己肯定感」について共通の捉えをもって話を伺うことができた。そして、日本人の国民性を交えながら国際的には高校生がどのように自己を捉えているかデータをもとに話をしていただいた。そして、実際の高校生にどのように指導をしていったらよいのか事例を提供していただいた。

自己肯定感の低い子どもたちの要因は一概ではない。様々な要因が重なって自己肯定感の低さに繋がっている。また、自己肯定感の低さは長い時間をかけて形成されており、解決が簡単にできるものではない。さらに自己肯定感の形成は本人の問題だけではなく、親やかかわる大人、育った環境や人生経験という多くの複雑な要因が絡み合って形成されている。よって支援もどの子にも同じようにはならないが、様々な取り組みによって見えてきたことをご紹介します。まず、大人がすべきことは子どもの自己肯定感の低さが長い年月をかけて形成されたものであることを知っておくべきである。そして、その子の抱える困難、悩みに寄り添うことの大切さを知ることである。時間をその子と共有していくことも大切であり、正しく自己について振り返られるようにかかわっていくことも重要な支援の方法である。学力を向上することでも自己肯定感を向上させることができることも伺った。

研修会後のアンケートの集計でも、講義の内容も大変わかりやすく今後の生徒への指導の参考になったという意見が非常に多かった。また、「自己肯定感」という大きなテーマをもとに話をしていただいたが、職員間で共通理解をする良い機会となった。

